

子育て支援活動における学生の学び

－金蘭おやこクラブの活動内容におけるねらいと課題－

Student's Learning in Childcare Support Activities
－ Aims and Tasks in Activities of KINRAN OYAKOKURABU －

辻 ゆき子¹, 宮里 慶子², 岸本 みさ子³, 串崎 幸代⁴

要旨

「金蘭おやこクラブ」は、2007年のスタートから今年で11年目を迎える。地域の親子の子育て支援と本学学生の子育て支援についての理解を促すことを目的とした事業である。本研究の目的は、このおやこクラブにおける1年生の学びに焦点を当て、より有意義で充実した学びにしていくためにどのような方策が有効かを前年度のプログラムと学生指導の変更の経緯から考察するものである。四年制大学の初年次における学生の理解力を探りつつ、将来的に保育者や教育者を目指す学生にとって、子育て支援に繋がる技術的及び精神的にスムーズな学びを積み上げていくための活動内容や授業展開の検討を行い、今後の課題や改善点及び方向性についても考察する。

キーワード：保育者養成、子育て支援、初年次教育、体験学習、達成感

Childcare Worker Training, Childcare Support, First Annual Education
Experiential Learning, Sense of accomplishment

I. はじめに

2003年の児童福祉法改正により、各種子育て支援事業が市町村事務として法定化され、子育て支援が法的根拠をもつこととなった。2008年に告示された保育所保育指針では「保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援を行う役割を担うものである」と保育所の子育て支援に対する役割を明確にした。さらに2008年改訂の幼稚園教育要領においても園庭開放や保護者に対する教育相談や情報提供、保護者同士の交流の機会提供、地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう明記された。このように、保育者はその保育対象が子どもから、子どもを含めた家族へと変化し、さらに子どもの保育及び保護者支援に加えて、地域の子育て家庭の「子育て」「子育て」を支える重要な役割が求められており、そ

れを遂行するための十分な資質・能力が要求されるようになってきているといえる。

子育て家庭自体が支援を必要とする背景には、とりまく環境が大きく変化していることにある。近年の少子化、核家族化、ひとり親家庭の増加などに伴い、育児相談の可能な人が身近にいない環境が増え、子育て家庭の孤立化が問題になっている。また、インターネットの普及により、雑多な情報が行き交う情報化社会の中で、自分に適した情報を選択する難しさに直面する問題もある。そのような環境のもと、地域のつながりが希薄化し、家庭における子育ての負担や不安を感じている保護者が増加している。また児童虐待相談件数もさらに増加し、子育てに不安や戸惑いをもつ子育て中の保護者の姿が浮かびあがる。厚生労働省が2017年8月17日に発表した2016年度の全国の児童相談所が対応した児童虐待相談件数の速報値によると、前年度より18.7%増え、統計を取り始めた1990年から26年連続で過去最多を更新した。特に、

1	Yukiko TSUJI	千里金蘭大学	生活科学部	児童教育学科	受理日：2017年9月8日 査読付
2	Keiko MIYAZATO	千里金蘭大学	生活科学部	児童教育学科	
3	Misako KISHIMOTO	千里金蘭大学	生活科学部	児童教育学科	
4	Yukiyo KUSHIZAKI	千里金蘭大学	生活科学部	児童教育学科	

本学のある大阪は2010年度から7年連続で虐待相談の件数が全国最多となっている。2015年度の死亡事例の検証においては、確認された52名のうち全体の8割が3歳までに、さらに0歳で亡くなったのはそのうちの7割にものぼっている。乳幼児を子育て中の保護者に対する支援が最重要であることはいうまでもない。

このような状況の中、実際の保育の現場に子育て支援力をもった保育者を送り出す使命を担う保育者養成校において、子育て家庭とそのとりまく環境を理解し、いかに実践的な子育て支援力を学生時代に育むことができるかが課題になっている。

1. 千里金蘭大学の

初年次教育における体験授業

2007年に開設された本学児童学科(2015年度より児童教育学科に名称変更)のコンセプトは、「子どもを学ぶ。私と出会う。社会に生きる」で、乳幼児や児童期の子どもの保育や教育に携わる専門職を「子ども支援のスペシャリスト」として養成することであった。将来的に小学校教諭・幼稚園教諭・保育士等のいずれの免許・資格を希望しているかにかかわらず、この養成課程の学生のモチベーションを高め、より主体的な学びを促進することを目的に「地域活動プログラム」としていくつかの授業が位置づけられてきた。

1年生対象プログラムには二つの活動があり、一つは地域の小学生との交流体験を行う「子ども遊びサポーター体験」であり、もう一つが「金蘭おやこクラブ」(以下、おやこクラブ)である。このおやこクラブは、地域の乳幼児の親子を対象にした子育て支援を目的に実施し、教員及び保育有資格者のスタッフが中心となって学内の施設を利用して行っている親子活動である。同時に1年生必修の「児童学基礎演習」という体験授業として学生は所属するゼミ単位で参加している。

保育者養成校において様々な子育て支援の活動がなされている中、小原他(2016)の養成校対象の調査研究の分類によると、本学の活動は「教室型」・「広場型」・「鑑賞・発表会型」のうち、キャンパス内で実施されている子育て支援活動の中では最も多い形態の「教室型」にあたるようである¹⁾。また同研究では、四年制大学でのこのような「教室型」の活動では1年生での参加は少なく、学内での学びの蓄積や保育所や幼稚園での実習経験を活かすことを考えて3年生が参加している割合が

高くなっていると推測されている。全ての1年生が参加し、授業の一環として組み入れている本学の活動は特徴的といえる。

本学で1年生を子育て支援活動に参加させている理由の一つに、入学時の資格・免許取得、専門職養成の入り口における動機づけがある。本学は入学時にコース制を設定していない為に、1年生の段階では自分の進路について明確な展望をまだもっていない学生も少なくない。そのため、様々な体験授業を通して自らの適性を見定め、2年生以降の学修を明確な目標をもって取り組んでいくことを期待しているのである。つまり、1年生の段階で「子育て支援」というところまで意識することは実際問題としてはまだ難しいと思われるが、その一つのスタートラインとしておやこクラブに参加する意義が大きいと考える。

「児童学基礎演習」のシラバスに記載の授業概要は以下の通りである。

1. 子ども支援協働研究室の子どもプレイルーム活動に参加し、そこで乳幼児やその保護者との実際のふれあいを通して基本的な観察力やかかわり方を学ぶ。
 2. 1. の体験を振り返り、整理し、記録することで、乳幼児やその保護者を实际的に理解する。
 3. 保育に必要な基本的技能の実践・試行の場として、自己の課題を明らかにするとともに、他の教科と関連づけて学習を進める。
- また、到達目標は以下のとおりである。
1. 子どもにかかわる基本的な考え方や方法を体験から学ぶことができる。
 2. 保育に必要な基本的技能の実践力をつけることができる。
 3. 子どもを観察する、記録する基本的な力を養うことができる。
 4. 自分自身の適性や今後の課題、進路について考える機会となる。

なお、現在、付設の幼稚園やこども園などをもたない本学学生・教員にとって、おやこクラブの存在は、体験の十分な保障と教員による直接指導の場をもてる意義ある教育環境でもある。

2. 金蘭おやこクラブの概要

おやこクラブの目的は次の3点である。

- ① 大学の人的・物的資源を地域の子育ち・子育て支援に向けて役立てる。

- ② 参加する親子・学生・教員等が協働し、子育て支援の場を創り上げる。
- ③ 学生の実体験の場とする。

本クラブの参加対象者は、0歳～就学前の乳幼児とその保護者とし、前年度末に募集している。2曜日を設定し、募集定員は各10組・計20組としているが、年々地域の保護者の間で本クラブの関心が高まり3倍近い申し込みがあるため、年齢・性別・居住地域をある程度考慮した上で抽選によって参加者を決定し、2017年度現在は計24組を受け入れている。登録された親子は1年間継続して活動に参加し、それ以降は他の学内子育て支援事業・ひろばへの参加を促している。活動は大学の授業と連動しており、前期（4月～7月）後期（9月～1月）の2期に分けて実施し、実施回数は前期12回、後期12回の年間24回となっている。

活動には各曜日の親子と活動を展開する保育スタッフ、10～15名程度の1年生、担当の教員が参加し、乳幼児期にふさわしい様々な遊びを毎回共に楽しむ。

学生はおやこクラブに実際に参加するまでに事前にオリエンテーションに参加し、その目的や自分達がそこで何を学ぶべきであるかについて学ぶ。

本クラブでの活動目標は次の3点となっている。

- ① 担当教員等の指導のもとに親子で活動に取り組む。
- ② 学生が、子どもに触れ、その遊びや行動をサポートし、共感し、協働する体験をする。
- ③ 親同士の交流をはかるとともに、親たちの主体的な子育て学習を支援する。

実際の参加においては、学生は、おやこクラブすべての回に参加するのではなく隔週で参加するので、体験の回でない振り返り授業時に体験後の記録についての教員の指導、参加に向けた教材研究・教材準備、自分達が企画する活動の企画・準備をグループディスカッションなどを通して行っている。

学生はこれにより、子どもの観察や関わりを通して子ども一人ひとりの発達を理解し乳幼児との関わり方を学んでいく。また親子の関わりの様子も同時に観察し、保護者とコミュニケーションをとることで、子育ての実態や保護者の気持ちを学んでいく。また、振り返り授業時に活動のねらいや内容に対する気づきや考察及び自分自身の関わり方や他の学生の関わり方から保育者の基本的な

態度や姿勢、保育技能の実践を反省、考察する。

3. おやこクラブと他の科目との連携

初年次から、講義における様々な専門的学修と並行し実際に乳幼児・児童・保護者と関わることで、その学びをより確かなものとしていくことでできると考えている。おやこクラブに絞って言えば、乳幼児の生活や遊びのサポートを担当することで子どもとの信頼関係を築くプロセスを体験したり、毎回同じ保護者との関わりを通して保護者から子育てや子どもとの関わり方を直接的に学ぶことを期待している。

おやこクラブと他の授業との連携として器楽演習（ピアノレッスン）や音楽表現の授業が挙げられる。保育技術として必要な音楽の基礎的な知識・技能を身につけることを計画的に行っている。一例をあげると、手遊びの実践については、音楽表現の授業で単にいろいろな手遊びを覚えるだけではなく、保育の中での導入・展開を考えての実践も行っている。それを実際におやこクラブで子どもや保護者の前で実践・体験するのである。

また造形表現の授業においてパネルシアターの基本的な作り方や着色の方法を学び、音楽表現の授業の中で演じ方を学び、実際に授業内で発表するようにする他、おやこクラブや大学祭で地域の親子を前にパネルシアターを演じる機会が設けられている。このように他の授業との連携を行うことで、様々な専門的学修がどのように実際の保育・子育て支援と繋がっているかを実感し、今後の学修に見通しや意欲をもつことができると考えられる。

4. 目的

本研究では、このおやこクラブにおける参加学生の学びに焦点を当て、活動内容の分析や学びのプロセスについて前年度と2017年度とを比較して検討していく。

2017年度からスタッフが交代することを機に、これまでの活動内容や実施方法を振り返り、学生の学びにおける課題をどのように改善するかを検討を行った。子育て支援観、学生の学びについての考え方は全員の担当教員・スタッフ間で必ずしも揺るぎなく統一されているわけではなく議論は継続し、現在も試行錯誤している。これまでの活動を否定するものではなく、ただ、下記のような学生の現状、学習課題について共通の問題認識の

うえに、今回変更したことの意義と課題を述べる。

学生の現状として、入学前までに乳幼児と接する機会が少なく、特に1年生にとっては当然ながら保育に関する専門知識も限られ、実習経験もまだ経ていないため、より緊張の度合いが大きい。緊張度が高い為に、自分自身がどのように行動すべきかに戸惑いを感じたり、乳幼児のごく当たり前の発達段階の姿に翻弄されたりすることもこれまで少なくはなかった。また子どもの前でうまく絵本を読めなかったり、手遊びの方法や子どもをひきつける術がわからず戸惑ったり、人前でのピアノ演奏も緊張してスムーズに弾けずに落ち込む学生も少なからず見受けられた。

授業アンケートや学生記録などからも明らかに、大半の学生がおやこクラブの活動を大変楽しんでいる一方で、このような1年生の姿から、大きな不安なく活動に参加し、より意欲的かつ効果的に学ぶことを可能にするために、変更の検討を行っている。失敗経験も適度かつ前向きな反省につながるならよいが、成功体験や充実感・達成感をもって次学年以降に進んでいくためにどうすべきかの問題意識も前提にある。

Ⅱ. 方法

以下の5つの項目について、昨年までのおやこクラブの実施方法・活動内容（プログラム）・授業展開等を振り返り、それをふまえた上での2017年度からの新たな試みを取り入れることになった経緯、さらに現時点での成果や今後の課題についての検討を行う。

1. おやこクラブのクラス編成について
2. 活動内容（プログラム）について
3. 授業スケジュールについて
4. 教材研究（絵本の選択）について
5. 保育実践（ピアノ演奏）について

Ⅲ. 結果及び考察

1. おやこクラブのクラス編成について

前述したように、おやこクラブの参加対象者は0歳から就学前の乳幼児とその保護者としているが、実際のところ3歳からは集団保育を受ける子どもが多いことから、おやこクラブに参加する乳幼児は3歳までの子どもがほとんどである。

昨年までは設定の2曜日に参加する子どもの年

齢を、両曜日ともほぼ均等になるように分けていた。その理由として、参加する学生にとっては幅広い年齢層の子ども達と一度に接することで様々な発達段階の子どもに触れ合いその発達を目にすることができ、参加の保護者にとっても自分の子どもと異なる発達段階の子どもの姿を見て成長の見通しをもつことができる双方のメリットがあった。しかし参加する子どもの年齢の幅が大きいことから、学生にとって学ばせたいその日の活動プログラムによっては発達の少々参加が難しい年齢層の子どもたちがいたり、保育スタッフがどの年齢層に焦点を当てて活動展開するべきかの選択に難しい一面があるというデメリットがあった。

そこで、今年度からは試行的に年齢層によって2曜日のクラス分けをする試みを行っている。1クラスは0歳から2歳児中心、もう1クラスは1・2歳から3歳児中心のクラス分けを行った。年齢別に2クラスに分けることで、主たるプログラムは同じでも、曜日毎に発達に応じた活動の展開を保育スタッフが工夫して行うことが可能となった。また、学生にとっては、同じような年齢・発達段階の子ども達の姿を見ることでそれぞれの発達段階の子どもの理解を深めることが比較的容易になってくると思われる。

また、前期・後期で学生が異なるクラスの子どもの関わられるよう入れ替え設定をし、1年の最終段階で学生全員に0歳～3歳の発達段階の理解を促している。その際には、2クラスの子どもの年齢層の違いに気付かせるような教員の働きかけが必要となってくると考えられる。

また、登録した特定の親子との継続的な関わりのため、子どもの成長のスピードに気づくこともできている。

＜学生の記録より抜粋＞

- ・2歳児が多いこのクラスでは成長のスピードが早く、特に「言葉の発達」と「自己主張が強くなる」「イヤイヤばかり言う」ことを感じた。
- ・年齢が1カ月違うだけでも子どもの成長は全然違っている。小さい頃の1カ月の重要性を実感した。

2. 活動内容（リズム活動）について

2017年度の金蘭おやこクラブの前期の活動内容は以下の通りである。主な活動内容（プログラム）はここ数年大きく変更はしていない。

回	前期の主な内容
1	好きな遊びを見つける, リズム体操他
2	親子でのふれあい遊び
3	戸外遊び (ボール遊び・追いかっこ)
4	手遊び・わらべ歌
5	パネルシアター
6	感触あそび (小麦粉粘土・パン粉粘土他)
7	リズム遊び (楽器を使って)
8	おもちゃ作り (スポンジ人形作り)
9	しゃぼん玉遊び
10	七夕製作
11	水あそび
12	水あそび

回	後期の主な内容 (予定)
1	製作遊び・触れ合い遊び 他
2	パラバルーン
3	ボール遊び
4	鬼ごっこ
5	みんなで運動会
6	秋のお散歩
7	焼き芋パーティー
8	お買い物ごっこ
9	お話劇ごっこ
10	音楽会
11	クリスマス会
12	おおきなあれー卒室記念製作

昨年までも同様に、親子での触れあい遊びや学生と一緒に楽しむ身体を使ったリズム遊びを取り入れ、特に昔から受け継がれるわらべうた遊びを中心に展開してきた。「わらべうた遊びは、子どもにとって運動的、言語的、社会的な発達の刺激となり、生きていくために必要な知恵や人間のかかわりを得るのに役立ってきた²⁾。」とあるように、わらべうた遊びの教育的意義は大きい。このような遊びを、既にあまりよく知らない親が多くなった保護者世代にも伝えていくことが養成校の子育て支援として大切である。2017年度も前期の4回目にはわらべうた遊びを中心に展開する回を設けた。

しかし、昨今の子どもを取り巻く音楽環境は非常に幅広く、日々の生活の中ではアップテンポでよりリズムカルな音楽に囲まれて生活していることも確かである。中には言葉が明瞭でなかったり年齢に合っていなかったり、また音域が高すぎたりして、子どもに与える音楽としてふさわしいかが議論されるべき音楽も見受けられる。2017年度

については乳幼児にふさわしい音楽・表現を選び、よりリズムの心地よさを感じ、十分に身体を動かすことの楽しさを知ることができる遊びや体操も毎回多く取り入れるように内容を変更した。これにより親子での触れあいの機会をより多くもち、身体を十分にのびのびと動かして遊ぶ楽しさの体験を提供し、家庭ではなかなかできない活動を保育スタッフ・他の親子・学生と一緒に楽しんでもらうことがねらいである。中村ら (2017) によると、「音楽活動を親子で行うことは親子のかかわりを深めるだけではなく、子どもの情緒を豊かにし、音楽的な能力を高めるきっかけを作ることができる」とある³⁾。

また、今泉ら (2012) の調査によると、地域で子育て支援の音楽的な活動を行った際、「楽器遊びやわらべ歌遊び、身体表現遊び、音楽を付けた絵本の読み聞かせなど様々な音楽活動を行ったところ、家庭では出来ない遊びの体験や初めての体験、生の楽器に触れる経験が出来る内容であるほど満足度が高くなるということだった。特に《楽器を使った遊び》の満足度が高く、また《身体を使った遊び》に意欲的に参加することを望む傾向があるようだ。」⁴⁾とある。

2017年度は、次々に展開されるリズム活動に対して、保護者や保育スタッフや学生の動きを見ているだけだった子どもが、回を重ねるうちに曲が鳴り始めるとすぐに体全体でリズムを取り、見よう見まねで嬉しそうに身体を動かして保護者や学生と一緒に音楽表現を楽しむ姿が見られるようになってきた。同じ曲・同じ表現を何回か続けて行うことで、曲や動きにも慣れて乳幼児なりに見通しをもって楽しむことができるようになり、新しい曲や動きを少しずつ組み入れることで、飽きることなくまた違った表現を学ぶことができ十分に楽しむことができていると考えられる。

また参加している学生にとっては、そういった乳幼児の姿を実際に観察することで、乳幼児にとっての音楽やリズムの有効性、反復することの意味や重要性、展開する方法や工夫についても学ぶことができていると考えられる。

＜学生の記録より抜粋＞

・何回も同じことをするというのは、子どもにとって楽しいと感じることを学んだ。同じことをすることで、覚えてできるようになり楽しいと感じる。それは子どもにとって遊びからの学びで

ある。

- ・手遊び・わらべ歌では子ども達は何回も同じことをすることが好きだということがわかった。親子で取り組む姿はとても楽しそうだった。

ただこの子育て支援の活動が、養成校の担う役割を考えた時、単純に保護者の希望や期待があるから行うという安易な活動になってはいけない。最近の流行の音楽、保護者や子どもが日頃よく聞く音楽重視になってそれだけに振り回されることにも留意する必要がある。本来子どもの育ちにとって何が必要であるかを考え、それを保護者に、そして学生に伝える為にどういった教員やスタッフの支援が必要であるかについて議論をし続けることが必要であろう。

3. 授業スケジュール・授業計画の変更について

おやこクラブへの学生の参加は必修授業として位置付けている。1 セメスターの前期15回の授業のうち、昨年までは初めの2回は事前オリエンテーション、1回は事後の全体的な振り返りにあて、残りの12回（2グループが隔週で担当するので各グループの参加は6回ずつ）をおやこクラブに実際に参加してきた。後期も同様の授業スケジュールであった。

内容的には、1 回目のオリエンテーションではおやこクラブでの体験学習についての意義や目的、方法についての講義が中心であり、2 回目はプログラムの活動内容についての説明やおやこクラブに参加する際の諸注意、自分達が参加する際の担当の仕事の割り振りなどを話し合う。そして2 回目の授業の後半には、その週から平行して既にスタートしているおやこクラブの見学を行うというのがこれまでの進め方であった。

2017年度は、これから自分達が実際にどのような活動に参加するのかについてしっかりとイメージできるように、参加前に複数回おやこクラブを見学する設定に変更した。

前期は実際の参加までに計4回の事前学習と見学の回数を増やした。そうすることで、これまでよりも詳細におやこクラブへの参加のイメージをもつことができたり、保育についての多少の基礎知識を学び、少しでも見通しをもって不安少なく参加できるようにと配慮した。従って前期のおやこクラブ参加回数が各グループ5回ずつと例年よ

りは1回ずつ減る結果となった。

<例年までの授業スケジュール>

回	①グループ	②グループ
1	事前学習：意義や内容説明	
2	事前学習：諸注意・担当の調整	
3	参加	担当の話し合い
4	振り返り	参加
5～14	*参加と振り返り（交互）	
15	前期の振り返り	

<2017年度前期の授業スケジュール>

回	①グループ	②グループ
1	事前学習：意義や内容説明	
2	事前学習：諸注意・見学	
3	事前学習：絵本の指導等・見学	
4	事前学習：見学・担当の調整	
5	参加	見学他
6	振り返り	参加
7～14	*参加と振り返り（交互）	
15	前期の振り返り	

授業スケジュールは上の表の通りである。まとめると、事前学習の回数を増やしたことで以下のメリットがあったと考えられる。

- ① 見学の回数が増え、おやこクラブのいろいろな場面を予め見学することができた上、漠然と見学するのではなく視点を絞って観察することができた。
- ② 絵本の持ち方や読み聞かせの方法など、基本的な保育技術などがある程度学んでから活動に参加することができた。

①について具体的に言うと、子どもたちが朝どのようにやってくるのか、どのような状況・様子で好きな遊びを見つけて遊び始めるのか、親子で遊ぶ様子はどのようなものなのか、保育スタッフはどのように親子にかかわっているのか等について見学することができるよう、2017年度は見学時間帯にも配慮しながら数回見学することで、おやこクラブ全体のおおよその様子をつかんでから実際のおやこクラブに参加することができるようになった。

実際の参加になると、保育スタッフが見学時にしていたように、学生が出席している子ども達の名前を呼んで出席調べをしたり絵本を読み聞かせたり手遊びをする担当がある。学生がスタッフのやり方を見よう見まねながらも、できるだけ主体

的に活動に参加することをねらったのである。十分に見学することで担当内容をしっかりと把握した上で自分達が次回から担当する問題意識をもち、また保育スタッフの言動や親子の様子を問題意識をもって焦点化して観察する姿がみられた。

②については、前期に絵本の読み聞かせを実践する学生は各グループ4人ずつだけであるが、後期以降に自らも経験することになる保育活動に興味・関心をもち、基本的な技術についての知識を得る時間をもてたことは有意義であったと考える。事前学習の時間を十分に確保することができ、加えて保育専門の教員が担当教員に増えたことで、実際の参加までに絵本の基本的な持ち方や読み方・選び方について、さらに手遊びについてのレクチャーを全員の学生に一斉にすることができた。もちろんこれまでもおやこクラブにおける保育スタッフの実践を実際に見て学びとり、学生自身が担当になった際に活かすことはしてきたが、現場で見聞き学びとる力が弱い現在の学生傾向を鑑み、全員で保育の基本技能について事前に学べたことで実際のおやこクラブでの失敗経験を感じる学生を少なくし、成功体験や達成感を感じられるように配慮した。学生が取り組む活動に対して、子ども達が喜んで参加しその姿を見ることで「がんばってよかった」「楽しんでいる子どもの姿を見るのが嬉しい」と思えることが、この先の学びの意欲に繋がっていくと期待できる。

現時点での担当教員の捉え方では、事前の見学を十分したとしても参加初回はさすがに緊張の度合いも高く、自分の行動について躊躇したり模索している学生がほとんどであったが、例年よりも早い段階で回の進行にも慣れて笑顔が多く見られ、自分の担当する事にも大きな不安なく参加しているように見受けられた。その分、参加回数は1回減ったものの、じっくりと準備ししっかりと見学することで、見通しをもって活動に参加できていたように感じられる。後期は前期の経験があるので例年と同様に参加回数が各グループ6回になる。前期と異なる親子と新しい出会いとなるが、前期の経験を活かし早い時期から新しい信頼関係を築く努力をしてくれるものと期待できる。

<学生の記録より抜粋>

- ・自分の緊張や不安が伝えわってしまうと子どもは楽しめないと感じた。
- ・1回目は1人の子どもばかりをみて対応するの

に必死だったが、回が進むにつれて子どもだけでなくその子どもの親と話したり、他の子どもが1人である時に話しかけてみたりと1回目より周りを見て自分がどうするべきかを判断することができた。

- ・1回目は親子との関わり方がわからずおどおどして、先生の指示のままに動くしかできず、時間の経つのが遅く感じた。しかし、2回、3回と繰り返し参加するうちに、とても楽しく感じて自分自身余裕ができた。

4. 教材研究（絵本の選択）について

絵本の読み聞かせを担当することになった学生はまず絵本を選ぶ必要がある。昨年までもおやこクラブの際に歌う歌や手遊びの載った冊子を副教材として教員が作製し、保育資料集として学生全員に配布してきた。その中に、乳幼児に適した絵本も参考として掲載していた。学生はそれらを参考に、また他の専門書を参考にしたり教員や保育スタッフに相談して自分が読む絵本を選んで読み聞かせを行ってきたのである。しかし2017度は年齢別にクラスを分けたこともあり、0歳から3歳の年齢の幅の中でもさらに細かくおやこクラブの各クラスの年齢の子ども達に適した絵本を資料集の中にそれぞれにリストアップした。

乳幼児と一言に行っても少しの年齢差で発達も興味も異なり受け入れられる絵本も異なってくるのは当然である。学生が絵本を選ぶ方法として、基本的にそのリストの中から選ぶ指導を2017年度は強化した。前年度までは学生の主体的な姿勢を期待しリストは推奨するにとどめていたかたちだが、今回やや強制的にリストから選ぶ指導を行ったのは、絵本そのものの理解が乏しく、その選択を安易に考えて、教員に相談もせず、自分で選ぶ学生が少なくなかったからである。

また子どもに適した絵本を読むことで、興味をもって子どもたちが見る確率も増えて、一人ひとりの学生が初めての「読み聞かせ」に失敗することも少なく、達成感を得ることが期待できると考えられる。1年生の時から、集中して絵本に食いつく子ども達の表情に出会うことを体験して、子どもにとっての絵本自体や読み聞かせの重要性を感じ、今後は発達について十分に学び、教材研究を深めていく中で学生自身が子ども達に合った絵本を選択できるようになってほしいと期待する。

5. 保育実践（ピアノ演奏）について

昨年までは子どものおやつの時間および保護者のお茶の時間を設定していたので、その際にピアノの練習としてその時間にBGMを学生が担当して行ってきた。

保育現場では、実際問題として子どもと一緒に歌ったりリズム遊びをする際にピアノを弾くことが求められる。就職の実技試験でもピアノ演奏が課されることが多い。もちろん実習においてもピアノ伴奏や弾き歌いの技術が必要とされ、3・4年生の本実習に出るまでに人前で演奏することに少しでも慣れ、子どもの前で演奏や弾き歌いをする経験を積んでおくことが非常に重要となる。子育て支援の現場では、ピアノが重要視されることは管見ながらあまりないと思われるが、本学の取り組みのなかでは、学生の学びの一つとして大切なことと考えてきた。

2017年度からは、親子一緒に遊びの時間を十分に確保する目的でおやつとお茶の時間をとりやめた経緯があり、前期については学生がピアノ演奏をすることはなく後期だけ担当する設定に変更した。これは本学の学生にとっては有効な変更と考えられる。

入学時にピアノの経験の有無を聞いたアンケートでは、本学の学生の傾向として、ここ数年では3割～4割の学生が全くの初心者で、あとの3割程度の学生が幼い頃に少しだけ習ったことがある程度で（バイエル程度）、保育者に必要な技術を身につけるにあたり相当な練習が必要となる。昨年までは、前期のうちから全員が担当としてピアノ演奏にあたったのだが、初心者でレッスンを始めてまだ間もなく片手でやっとのことで何とかメロディーらしき旋律を弾く学生も見受けられ、たとえばBGMであっても親子の前で聞かせることを恥ずかしく思う学生もあり、その反省から練習をしないといけないと気持ちを引き締める学生もいたが、より苦手意識を高めた場合があったことは否めない。

中山（2008）によると、ピアノ演奏をはじめとする音楽的能力の向上のためには、基礎としてのソルフェージュ力の定着が不可欠であり、ピアノ学習初心者は読譜力が低いゆえにそのことが演奏の妨げになっていることが明らかになったとしている⁵⁾。現に本学の音楽関連の授業での調査でも、ピアノ初心者はこれまで基礎的な楽典をしっかりと学んでこなかった者が多く、音符の長さや拍

子・リズムの捉え方、様々な記号の意味の理解が難しいことが明らかになっている。特に、「ヘ音記号」による読譜を苦手とする学生が多い。こういった音楽の基礎力を養うための授業は、1年生の前期からこのおやこクラブの授業と並行して行われ、前期終了までにはある程度の読譜力が身につくように履修計画がなされている。

また、自分だけが練習で弾くのは異なり、人前で弾くことのプレッシャーは非常に大きく、初心者の不安な心もちはいかほどかと推測される。そうでなくても、大人になってからの初めてのピアノレッスンは、幼い頃のそれより指の動きも悪く、なかなか思うように進まないのが現状である。人前でうまく弾くことができず失敗体験をしてしまっただけで、演奏すること自体に恐怖心をもつことにもなりかねず、この先のレッスンの意欲も削がれてしまう懸念がある。

子どもと大人との学習に対するアプローチの方法には差があるという⁶⁾。児童期までは他人や社会をそれほど意識しない自己中心的な自我意識が主であるが、青年期においては、他我を大きく意識した自我へと変化していくという。自己の身体や能力、失敗への不安等、自己自身に関する内部的な原因によるものが多く、劣等感や孤独感に陥る要因にもなる。「特に女子に多く見られるものとしては、中学生・高校生・大学生と発達していくにつれて、自分自身に対する見方が厳しくなり、自己受容が低下し自己批判が高くなる」⁷⁾という現象が見られる。指導する側としては、学習にとっての不要な不安を取り除き、正しい自己評価に導くことが求められる。

このような青年期の精神的発達から考慮しても、また、初心者が多い本学の現状の中、前期から人前で演奏することをあえて課する必要性は少ないと考え後期のみ担当を課す変更に至っている。そのねらいとしては、前期の間に少しでもピアノレッスンを重ね、試験等において人前で弾く経験も積み、不安を少しでも減らして後期に臨ませることにある。後期初めには予め曲名を知らせ、十分に練習を積む期間を与えておいて、その回毎に応じた季節の歌や誕生日の歌の伴奏を全員が担当する。ピアノ演奏の担当を後期に延ばした実際的な効果や経過については、今後の継続した研究としていきたい。なお、前期でも、学生主体の活動等の際に、学生同士の話し合いによってピアノを弾く担当者を決め、親子の前でピアノを弾く経験

をする学生がいない訳ではない。

6. 学生にとってのおやこクラブでの学び

おやこクラブにおいて1年生として非常に多くのことを学んでいることが学生の記録から読みとれる。ここまでも本文の中に学生の記録の抜粋を入れてきたが、以下親子との関わりや子育て支援についての学生自身が学びとったと考えていることや気づきについて2017年度履修学生の一部の感想であるが代表的なものを示す。

①学生と子どもとの関わり

- ・遊びに参加したがる子どもに対しては、隣で楽しそうに遊んでいることで子どもも興味を示すということに気付いた。
- ・子どもに1番伝えたいことを、どういう方法で伝えるのかを考えることが大切だと感じた。

②学生と保護者との関わり

- ・後半になると保護者と関わるが増え、子どものことについてもいろいろと教えてもらうことができた。小さい子どもは自分の思いを相手に伝えることがまだできないので、保護者とのコミュニケーションはその子どもの情報を知る上でとても大切だと感じた。
- ・保護者は自分たちが関わる子どもの保護者という立場でもあるが、自分自身が将来経験するかもしれない出産・育児の先輩ともいえると気付いた。
- ・保護者と会話が弾むようになり、泣いている時や甘えてくる時、怒っている時などにどのような対応を取っているかも教えてもらった。保護者との会話の中で様々な情報を得ることができる。
- ・保護者の子どもに対する行動を見て、いろいろな方法で子どもに興味をもたせたり気持ちを落ち着かせていることに気付いた。

③保護者理解と子育て支援の意義

- ・小麦粉粘土等新しい遊びに対して、はじめはやりたがらない子どもが多かったが、保護者が興味・関心をもって遊ぶことで子どもにも体験させる機会を作れることがわかった。
- ・保護者はいろいろな不安を抱えていたりするが、なかなか保育者に相談できなかったりする。そんな時に保育者の方からコミュニケーションをとることで話しやすい環境になったり信頼も築けると思う。実際におやこクラブのスタッフはそうしていた。自分もできるだけコミュニケー

ションを取ろうと努力してみた。

- ・保育者と保護者の会話を聞いていたら、スタッフが子どもの特徴などを話し、保育をする中でその子どもに合ったアドバイスをして保護者もそれを納得して聞いているようであった。保護者が不安に思っていることや悩みをすぐにスタッフに話し解決することができるので、育児ストレスを軽減することができると思った。
- ・おやこクラブというのは、子どもたちが学生や友達と仲良くなる場、そして学生がスタッフの行動を見て保育について学ぶ場だと私は初めの頃に思っていた。しかし実際に体験してみると、保護者の方々も学んだりいろいろなことを知ることができる場所だと感じた。
- ・2週間に1回しかないこの時間を私自身楽しみにし、保育者としての技術をつけたいという意欲と1年生からこのような場所があるという感謝がある。

IV 今後の課題

おやこクラブスタート11年目の節目で、学生の学びに焦点を当て、子育て支援に繋がる学びをより充実した達成感のあるものとするために、活動内容や授業展開の再検討を行ってきた。それぞれの変更の意図や経緯・現段階で見られる教育的効果はそれぞれⅢに示した通りである。しかし、これらは2017年度前期からの変更が主で、教員の捉え方としては少なからず効果があったと思われるが、学生の成長の様子や学びの成果を長期的に見届けるまでには至っていない。今後もこのような新たな改善を常に取りつつ、継続して研究を続けていきたいと考える。

また、今回は保育者・教育者を指すものとしての1年生の学生の初年次教育としての保育技術及び意欲と主体性をもたせるプロセスに焦点を当てた。学生の記録からは、おやこクラブにおける子育て支援の意義や役割について感じ始めている者も見受けられるが、子育て支援の実践力をつけるというよりも保育技術の実践を通して保育者のイメージ、子育て支援のイメージをつかむにすぎない。2年次以降の子育て支援に直接的に関連する科目の履修などによって、自分自身の体験が子育て支援としてどのようにつながっているか改めて振り返ることになるので、長期的な視点で子育て支援力の育成としての成果を考えなければなら

ないだろう。

また、学生の体験授業において、特に振り返り学習が重要である。記録については、教員が配布している活動内容のプリントを元に活動プログラムに学生自身がどのように参加した親子に関わったのか、さらにその日の活動のねらいや環境構成についての考察も書くことになっている。入学後すぐは、正しい日本語表記をすること自体が難しく、話し言葉のままで表記したり敬語を正しく用いることができなかったりすることが非常に多い。

学生を指導する担当教員は、記録の書き方以前のこのような文章の書き方の指導に力が入りがちになるが、限られた授業時間かつ1年生段階の指導で重要なことは、記録指導を通して学生の観察力を高め、自身の行動を振り返ることを促すことである。記録の指導の他、各クラス・ゼミ担当教員にもよるが、おやこクラブを撮影したビデオ記録を利用したり、グループディスカッションを通した振り返りを行っているが、今後はアクティブラーニングの手法を取り入れていくことも課題である。

また、実際は振り返りの授業は次回の準備活動と同時併行で実施され、十分に行えているとはいえない。体験授業の回数を減らしたくないあまり、振り返りの授業時間が限られているわけであるが、これについても今後の検討課題である。

保育者にとっては目の前の子どもやその保護者だけの支援に留まらず、地域に住む子育て中の親子全般への支援が求められている今の社会において、保育者養成校に求められる学生の子育て支援力の実践での育成が非常に重要な責務であると考えており、どのような教育的支援が有効かを今後探っていききたい。

VI 謝辞

これまで、長きにわたりおやこクラブを発展させ支えてくださった先生方、保育スタッフ、そして新たなおやこクラブのためにご協力いただいた方々に、また学生に温かく関わっていただいたたくさんの親子の皆さんに感謝申し上げます。

VII 参考文献

- 三浦主博 (2016). 保育者養成校がキャンパス内で行っている子育て支援活動に関する調査研究・共立女子大学家政学部紀要, 第62号, 153-163
- 2) 畑玲子・知念直美. (1994). 「幼稚園・保育園のわらべうた」. 明治図書
- 3) 中村礼香・丸太愛子. (2017). 子育て支援講座における音楽遊びの実践. 南九州地域科学研究所所報, 第33号, 65-72
- 4) 今泉明美・有村さやか. (2012). 子育て支援の音楽表現遊びの実践についての一考察 ～地域子育て支援の現状と課題の分析～. 小田原女子短期大学研究紀要 第42号 8-20
- 5) 中山由里. (2008). ピアノ教育の導入期における授業についての一考察－ピアノ学習初心者への講座を通して－. 九州女子大学紀要, 人文社会科学編, 第44号(3) 67-8
- 6) 山川範子・山本真市・倉智佐一共著. (1968). 教育のための発達心理学. 創元社
- 7) 仙崎武・吉田辰雄編著. (1967). 青年期心理学. 福村出版
- 1) 小原敏郎・中西利恵・直島正樹・石沢順子・